

日本パラリンピック委員会より連絡があった連絡事項を当連盟用に変更しました。

日本身体障害者陸上競技連盟 事務局

日本パラリンピック委員会

ブースティングについての考え方

IPCが独自に規定している「**ブースティング (Boosting)**」につき、十分に周知徹底していないため、選手、指導者に混乱があるようです。つきましては、「ブースティング」について、2009年版IPC作成の文書に基づき、わかりやすく以下に解説致します。

なお、ブースティングは従来IPC独自のドーピング禁止方法としてとらえられてきましたが、現在は「ドーピング禁止方法」ではなく、IIPC Handbookにより規定されている禁止方法となっています。

ブースティングとは：

第6胸髄節レベル以上の障害を有する脊髄損傷者が、競技能力を高めるために、膀胱に多量の尿を貯めたり、血管を縛ったりすることで、意図的に高血圧状態を生じさせることをいいます。

1. IPCによる「ブースティング」の定義と禁止理由

- 1) 意図的に引き起こされた自律神経過反射をブースティングと呼ぶ。
- 2) ブースティングは、健康に害を及ぼすために、IPCとしては、競技会において危険な自律神経過反射状態で競技することを禁止している。

2. 自律神経過反射とは？

- 1) 病態： 第6胸髄節レベル以上の障害を有する脊髄損傷者（頸髄損傷者、上位胸髄損傷者）にみられる症状で、急激に発症する高血圧と頭痛を特徴とする。
- 2) 誘因： 膀胱の過伸展、留置カテーテルの刺激、膀胱結石の刺激など。
- 3) 症状： 発作性の高血圧、頭痛、発汗、顔面紅潮、徐脈、鳥肌など。

*血圧が上昇すると、精神的・心理的興奮をうながし、競技能力を高めることがある。第6胸髄節レベル以上の障害を有する脊髄損傷者は、自律神経系がうまく機能しないため、膀胱に尿がたまったり、体のある部分が圧迫されたりすることで発作性の高血圧を起こす場合がある。この作用を意図的に用いた方法を**ブースティング**という。ただし、こうして引き起こされた発作性高血圧は200mmHgを越えることもあり、非常に危険であるため、IPC Handbookにより禁止されている。

3. 競技会におけるブースティングに関する検査

- 1) ブースティングの検査は、IPCによって任命される医師または医療スタッフによって行われる。
- 2) 検査は、競技の前にウォームアップエリア、コールエリアやその他の場所で、いつでも行われる可能性がある。
- 3) 検査に協力しない場合、競技への参加は許可されない。
- 4) 実際の検査方法
 - (1) 危険な自律神経過反射状態とは、収縮期血圧が180mmHg以上であるときをいう。
 - (2) 競技者の収縮期血圧が180mmHg以上の場合には、1回目の検査の約10分後に再検査される。

- (3) 2回目の検査でも収縮期血圧が180mmHg以上である場合、検査担当者は技術責任者（Technical Delegate：TD）に、対象競技に参加させないように伝える。
- 5) 意図的な自律神経過反射について
 - (1) 自律神経過反射を誘発するどんな意図的な試みも禁じられており、発覚すればTDに通報される。
 - (2) この場合、収縮期の血圧に関係なく、競技者は特定の競技への参加資格を剥奪される。

4. 高血圧を有する高位脊髄損傷者について

- 1) 第6胸髄節より高位の脊髄損傷を有する競技者が高血圧である場合、競技者はそのことを証明するため、競技参加の前に、医学的証拠を示さなければならない。
- 2) この医学的証拠として、競技者の安静時血圧と治療内容を示す必要がある。
(14日間の安静時血圧の情報が必要となるため、早急にJPCに相談すること)

5. ブースティングに対するNPCの責任について

自律神経過反射をモニターすることは、競技者が所属するNPC（特にその医学チーム）の責任である。この責任は以下を含む：

- 1) 競技者がコールエリアに入る前に過反射状態でないことを確認すること。
- 2) 競技者が過反射状態を引き起こす、または誘発する可能性のある方法を使っていないことを確認すること。
- 3) 自律神経過反射がないか検査する人を準備しておくこと（必要に応じて、競技者の安静時血圧のリストを持参）。

6. まとめ

- 1) ブースティングは厳密にはドーピング禁止方法ではないが、IPCが独自に選手の安全を考慮し、規定している禁止方法である。
- 2) ブースティング検査に対する協力拒否はドーピング検査同様に禁止されており、拒否すれば競技への参加が取り消される。
- 3) 日頃からブースティング検査対象となる選手については、安静時血圧をチェックし記録しておく必要がある。競技会では、上記5-1) - (1)に記載したように、競技参加前に安静時血圧をチェックし、把握しておく必要がある。

7. 最後に

「ブースティング」という言葉は聞いたことがあっても、その実際についてはよくわからない方が多いと思いますが、パラリンピック大会では毎回、実際に検査が行われています。過去ブースティング検査が実施されていない競技であっても、今後は検査が行われる可能性がありますので、関係者各位におかれましては、ブースティングに関する理解を深め、混乱を生じないように選手に対してご指導をお願い致します。

2011年5月29日

日本障害者スポーツ協会
医学委員長 陶山 哲夫
アンチ・ドーピング部会長 草野 修輔